

衛研ニュース

No.131



昨年の春にスタートした花粉情報システムのメニューが更新されました。飛散開始前は花粉前線がトップページに表示されます。飛散開始しますとリアルタイム花粉モニターからの実測値が表示されるようになります。“ゆとり都山形”のトップページ (<http://www.pref.yamagata.jp/>) からご覧になれます。また携帯電話でもご覧いただけます。モバイル版のURLは、[i-mode] <http://homerun.wni.co.jp/kafun/i/>, [Vodafone live] <http://homerun.wni.co.jp/kafun/j/>, [Ezweb] <http://homerun.wni.co.jp/kafun/ez/>です。ご利用ください。

も く じ

- ※ 山形県感染症患者発生状況（2003年）…………… 山形県感染症情報センター (2)
- ※ 第24回山形県衛生研究所業務報告会発表演題 …………… (4)
- ※ 日本マス・スクリーニング学会技術部会研修会に参加して …………… 生活疫学部 安部 悦子 (5)
- ※ 衛研ニュース総目次 (No.121-130) …………… (5)
- ※ 薬になる植物 (62) カギカズラについて …………… 理化学部 笠原 義正 (6)

編集発行 山形県衛生研究所

平成16年3月10日発行
〒990-0031 山形市十日町一丁目6番6号
Tel. (023) 627-1190 企画情報室
Fax. (023) 641-7486
E-mail: eiken@pref.yamagata.jp

山形県感染症患者発生状況(2003年)

山形県感染症発生動向調査事業にもとづく、2003年1月から12月までの主な疾患の患者発生状況について報告します。

1 定点把握感染症(週報)

(1) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎(図1)

患者報告数は夏季を除き年間を通じて多く、秋季から冬季にかけて多発した。報告数は前年に比べ、20%ほど増加した。患者発生の地域性は比較的小なかった。患者の年齢は4-6歳が中心であった。

(2) 感染性胃腸炎(図2)

調査対象疾患のなかではインフルエンザと並んで報告患者数が多く、2003年の患者発生パターンは典型的なものではなく、前年と比べ1-3月の報告数は比較的小なかった。患者の発生は年間を通して認められたが、多発の中心は冬季であった。冬季の原因ウイルスとしてはノロウイルスやロタウイルスが多い。患者の年齢は小児から大人まで幅広かった。

(3) 水痘(図3)

毎年多発するが、1年おきに増減をくり返している。2003年は少ない年であった。例年冬季と夏季に多発するが、2003年は冬季のピークが目立った。最上、庄内での発生が比較的多かった。患者の年齢は1-5歳が多かった。

(4) 手足口病(図4)

2000年の流行時と比べ患者数は約2分の1に減少した。2003年は前年の2倍の報告患者数であった。特に目立ったピークはなく、夏季から冬季にかけて村山、置賜、庄内へと流行が移っていった。庄内地区での多発が目立った。患者は1-3歳が中心であった。患者からはエンテロウイルス71型が分離された。

(5) 伝染性紅斑(図5)

2003年の報告患者数は前年の2分の1であり、経年的にみて、少ない年であった。春季から夏季にかけて多発した。庄内地区でのみ多発した。患者は3-7歳が中心であった。

(6) ヘルパンギーナ(図6)

毎年夏季に決まって流行する。2003年は前年よりも1週ほど遅れて流行し、その規模は比較的大きかった。庄内地区での発生が目だった。患者の年齢は1-3歳が中心であった。患者からはコクサッキーウイルスA4およびA10型、エコーウイルス30型が分離された。

(7) 流行性耳下腺炎(図7)

2002年の大流行のあとで、患者報告数は激減し、年間を通して散発発生で推移した。

庄内地区での発生が他地区に比べ多かった。患者の年齢幅は3-6歳が中心であった。

(8) インフルエンザ(図8)

毎年冬季に流行するが、年によりその規模は異な

る。2003年は前年より1カ月ほど早い1月中旬から流行し始め、報告患者数も前年の1.5倍となった。全体として他地区に比べ最上地区からの報告数が多かった。これは同地区における11月から12月にかけての流行が大きく影響している。患者は幼児から老人に至るまで全年齢層に及んだ。1-3月の患者からはA香港型およびB型ウイルスが、12月の患者からはA香港型が分離された。

(9) その他の疾患

咽頭結膜熱は1984年以来の大きな流行となった。9月から12月にかけて村山地区で流行した。患者からはアデノウイルス3型が分離された。基幹定点(病院)からの報告では、マイコプラズマ肺炎が夏季から冬季にかけて村山地区で多発した。

2 全数把握感染症(週報)

届け出対象となっている45疾患のうち11疾患の患者が報告された。腸管出血性大腸菌感染症の報告患者数は前年の約半数であったが、他の疾患に比べ多かった。また、後天性免疫不全症候群の報告数が2003年だけで5名とこれまでに多く多かったことが注目される。ジアルジア症の患者がはじめて報告された。

3 定点把握感染症(月報)

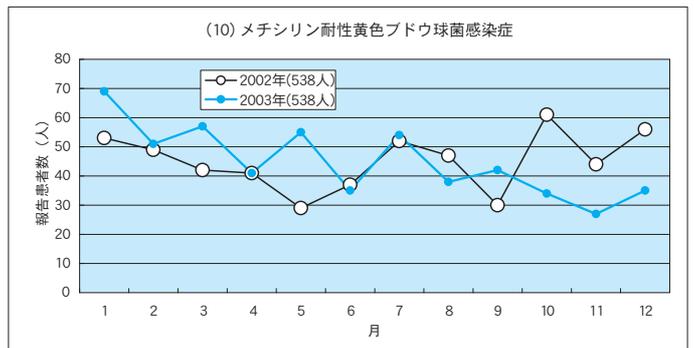
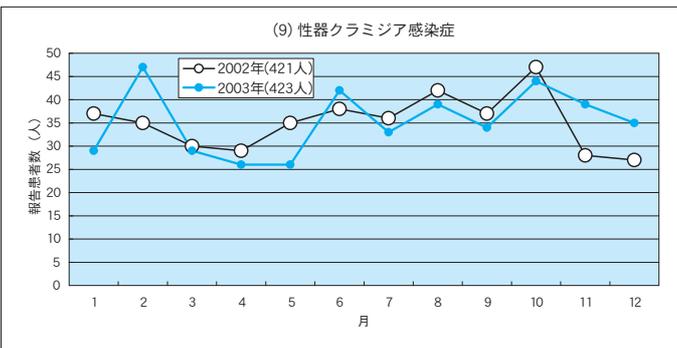
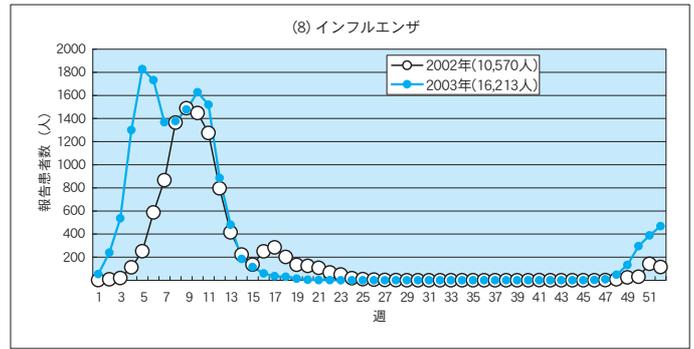
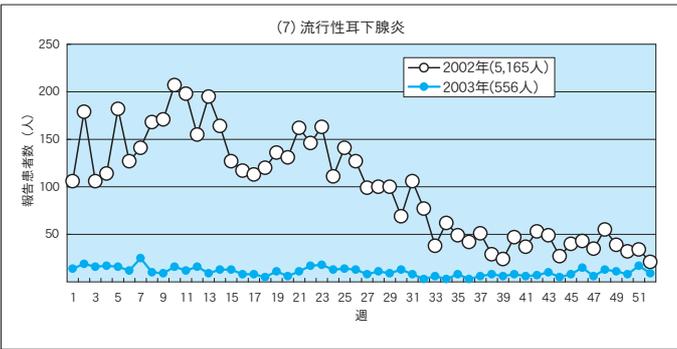
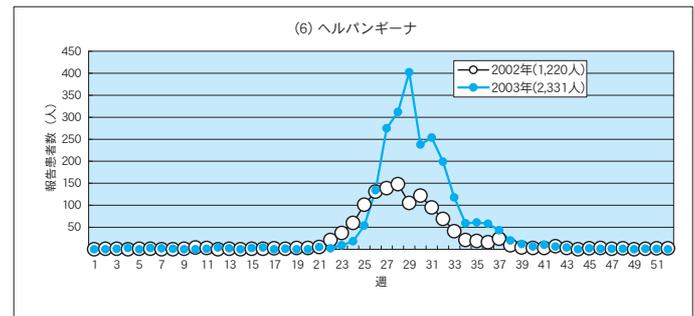
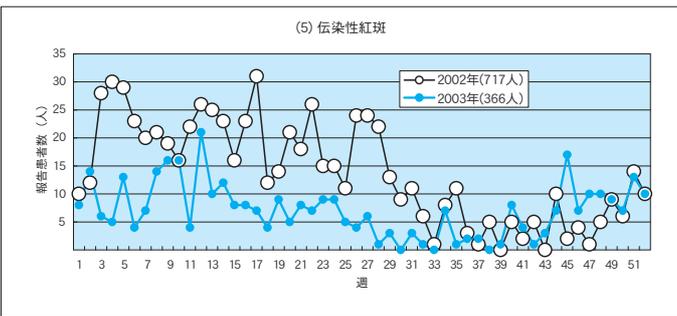
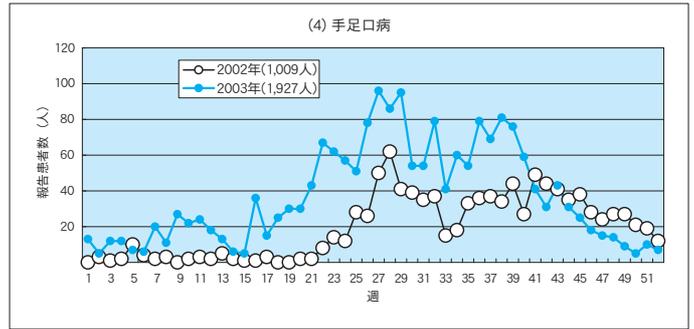
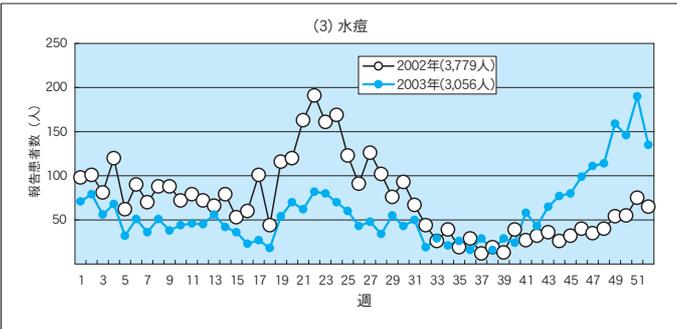
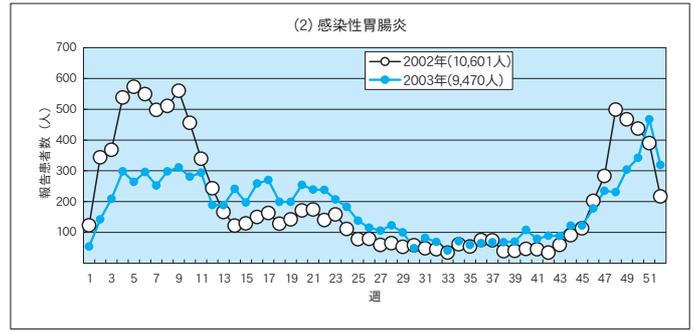
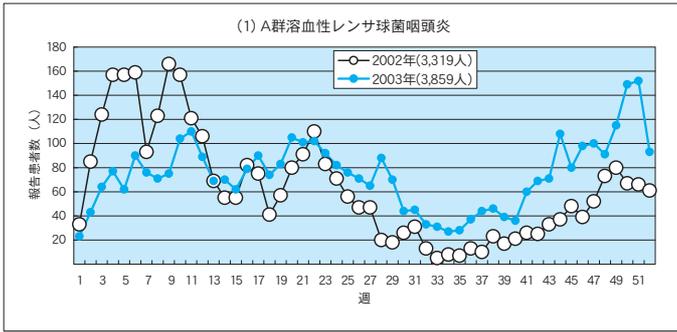
性感染症4疾患の中では性器クラミジア感染症(図9)の報告患者数が最も多かった。報告数は前年とほぼ同数であった。季節的には夏季から冬季にかけて増加する傾向がみられた。患者の年齢は10代から30代までが多かった。20代までは女性の報告数は男性の約1.6倍であるのに対し、30代以降では男性は女性の約2.2倍の報告数であった。次に多い淋菌感染症は年々増加しており、前年に比べ50%以上増加した。患者の75%が男性であった。薬剤耐性菌3疾患ではメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症(図10)が最も多かった。この疾患は年々増加する傾向がみられるが2003年の報告数は前年と同数だった。患者の年齢は70歳以上が全体の60%以上を占めた。

*2003年10月1日感染症法改正により新たに加わった疾患については、RSウイルス感染症(定点把握:週報)のみ患者報告があった。

(山形県感染症情報センター)

※情報収集定点医療機関数

	村山	最上	庄内	置賜	計
小児科定点	13	3	8	6	30
インフルエンザ定点	20	5	13	10	48
眼科定点	4	1	2	1	8
S T D 定点	4	1	3	2	10
基幹定点	4	1	3	2	10



第24回山形県衛生研究所業務報告会発表演題

平成16年3月1日(月) 実施

- 1 農作物中のテフルベンズロン等農薬のLC/MS/MSを用いた分析法の検討
理化学部 酒井真紀子
・農作物中の残留殺虫剤のHPLC、LC/MSによる同時分析およびLC/MS/MSによる確認試験分析法の検討を行った。
- 2 養殖魚におけるオキシテトラサイクリンの分析法の検討
理化学部 須貝 裕子
・動物用医薬品の畜産水産食品における残留を検出するため、養殖魚を使ってテトラサイクリン系抗生物質の迅速で精度の高い分析法の検討を行った。
- 3 マウスの血糖値に対する食品の影響
— 高血糖マウス作製 —
理化学部 佐藤 敬子
・県産食品による糖尿病の予防および進行遅延等を目的とした、血糖降下スクリーニング法を確立するためマウスを使って検討を行った。
- 4 山菜・キノコ等生体調節機能を有する食材の機能解析と活性物質の探索 (所調査研究)
理化学部 笠原 義正
・疾病の一因となる活性酸素やフリーラジカルの各種食材による消去作用および関連する抗炎症作用、抗ストレス潰瘍作用、血糖降下作用等をみるため、食材のスクリーニングを行った。
- 5 蔵王温泉の温泉要素の変動
— 温泉成分予測の試み —
理化学部 長岡 一郎
・蔵王温泉の温泉成分変動の動向を知るため、自己帰帰和分移動平均モデルを利用して4源泉について各成分の予測を行った。
- 6 温泉の再分析結果 (平成15年度)
理化学部 阿部 恵子
・温泉の資源保護と適正利用の基礎資料とするため、10年毎に計画的に実施してきた温泉成分分析結果について取りまとめた。
- 7 先天性代謝異常等スクリーニング検査実施状況 (平成15年度)
生活疫学部 菊地 恵美
・平成15年度に実施した先天性代謝異常等スクリーニング検査状況について取りまとめた。また、自家調整試薬によるポイトラー法について検討した。
- 8 平成15年度神経芽細胞腫マス・スクリーニング検査実施状況
生活疫学部 金子 紀子
・平成15年度に実施した神経芽細胞腫マス・スクリーニング検査状況、事業開始以来の患者状況および事業休止に至った経緯について取りまとめた。
- 9 花粉等環境アレルゲンの季節、生活環境による変動および存在形態に関する研究 (所調査研究)
生活疫学部 安部 悦子
・花粉曝露量と行動との関係等を知るため、主にイネ科カモガヤ花粉を対象に屋外、室内および人の吸入量についてアレルゲンの測定を行った。
- 10 空中花粉アレルゲンの定量と双方向性の花粉情報
企画情報室 高橋 裕一
・花粉アレルゲン量を情報化するため、その測定方法、花粉飛散量とアレルゲン量および自覚症状との関係等について検討した。
- 11 腸管出血性大腸菌の毒素型と症状
微生物部 大谷 勝実
・腸管出血性大腸菌の病原因子である志賀毒素と患者の症状との関連性を検討するため、感染者の毒素遺伝子保有状況と主症状との関係を調べた。
- 12 腸炎ビブリオ感染症発生動向調査および感染源調査 (所調査研究)
微生物部 池田 辰也
・腸炎ビブリオ感染症の感染源、感染ルートを解明するため、河川汽水域と患者から分離された菌の遺伝子解析等を行った。
- 13 山形県におけるNorovirus (NV) 感染事例について (1999年12月～2004年1月)
微生物部 村田 敏夫
・1999年12月から2004年1月の間に山形県で発生したNorovirus集団感染事例について、原因施設、原因食品、感染様式等の観点から取りまとめた。
- 14 A群溶血性連鎖球菌の分離状況とT型別
微生物部 最上久美子
・1999年から2003年に山形県内の患者から検出されたA群溶血性レンサ球菌の血清型別検査成績について、全国の状況等と比較し解析した。
- 15 2002/2003インフルエンザシーズンに始まった手足口病の流行
微生物部 安孫子千恵子
・インフルエンザ流行中に手足口病が多発した2003年の事例について、ウイルス分離状況等を中心に解析した。
- 16 2003年のコクサッキーウイルスB型に対する中和抗体保有状況 (所調査研究)
微生物部 水田 克己
・コクサッキーウイルスB型の山形県住民に対する侵淫状況を明らかにするため、ウイルス分離、抗体価の測定等を行った。
- 17 2003年山形県感染症発生動向調査の流行疾患
企画情報室 溝口 二郎
・山形県における感染症患者発生状況について、2003年に流行した主な疾患の特徴を年次推移および病原体検出状況とあわせて解析した。

衛生研究所の論文・学会発表 (2003年9月～2004年2月)

- 1 溝口二郎、菅野穎一、三條加奈子、穀野真一郎：
山形県内で11月に小流行したAH3型インフルエンザ、病原微生物検出情報25 (1), 9, 2004
- 2 Mizuta K. Abiko C. Murata T. Itagaki N.
Katsushima N. Akiba T. Sakamoto M. Ootani K. Murayama S: Re-emergence of echovirus type 13 infections in 2002 in Yamagata, Japan, J Infect 47 (3), 243-347, 2003

日本マス・スクリーニング学会技術部会研修会に参加して

昭和60年から国の事業として実施されてきた神経芽細胞腫スクリーニングは平成16年4月から休止することになり、各自治体および検査センターではその後の対応がせまられている。本県を含め多くの自治体では休止となる予定であるが、検体採取時期を遅らせたスクリーニングを自治体独自で実施する県、市、あるいは有料化を行い、希望者に検査を実施する検査センター等、今後の予定が報告された。

また、先天性代謝異常等検査において対象外疾患（シトリン欠損症、門脈-体循環短絡、乳児肝炎等）も見つかる可能性が出てきており、その対応には全国的に統一

された形で法的、行政的整備が必要であることが報告された。また、万一その疾患で医療費が必要となった場合、国からの補助が受けられるようなシステム作りが急務であり、学会として国に要望することが提案された。

学会長は、適切な治療で健康になれる患児を早期に発見し、治療することは、その児の自己実現のみならず家族、自治体にとって大きな社会的利益となることを、スクリーニング従事者が機会ある度に周囲に訴えることが大切と述べた。

(生活疫学部 安部 悦子)

衛研ニュース総目次 (No.121~130)

No.121

- ◇今年の夏かぜの原因ウイルスは？
微生物部 水田 克巳(2)
- ◇多発していますO157感染症
微生物部 大谷 勝実(3)
- ◇突発性難聴を患って
(3)
- ◇ご存知ですか。有機JASマーク
理化学部 辻 浩子(4)
- ◇衛研ニュース総目次 (No.106~120)
(5)
- ◇薬になる植物 (52) ワサビについて
理化学部 笠原 義正(6)

No.122

- ◇平成13年度インフルエンザ流行予測 調査結果
微生物部 水田 克巳(2)
- ◇山形県における出生の動向
企画情報室 菅野 颯一(3)
- ◇来春のスギ花粉飛散予想
企画情報室 高橋 裕一(3)
- ◇薬になる植物 (53) ジャノヒゲについて
理化学部 笠原 義正(4)

No.123

- ◇山形県感染症患者発生状況 (2001年)
山形県感染症情報センター(2)
- ◇水道水等の残留塩素濃度測定法が変わりました
理化学部 伊藤 健(4)
- ◇出生率の減少は何によって説明できるか
企画情報室 菅野 颯一(5)
- ◇第22回山形県衛生研究所業務報告会
(5)
- ◇薬になる植物 (54) ピワについて
理化学部 笠原 義正(6)

No.124

- ◇春なのに 再び インフルエンザ
微生物部 水田 克巳(2)
- ◇温泉成分分析の登録分析機関となりました
理化学部 阿部 恵子(3)
- ◇第39回全国衛生化学協議会年会について
理化学部 佐藤 和美(3)
- ◇薬になる植物 (55) レンギョウについて
理化学部 笠原 義正(4)

No.125

- ◇人と動物の共通感染症 Q熱
微生物部 大谷 勝実(2)
- ◇シックハウス症候群とは？
理化学部 緒方 操(3)
- ◇薬になる植物 (56) クコについて
理化学部 笠原 義正(4)

No.126

- ◇「ウエストナイル熱」が感染症発生動向調査の対象疾患に
山形県感染症情報センター(2)
- ◇来春のスギ花粉飛散予想
企画情報室 高橋 裕一(2)
- ◇2002年のエコーウイルス13型の再出現
微生物部 水田 克巳(3)
- ◇薬になる植物 (57) イノコブチについて
理化学部 笠原 義正(4)

No.127

- ◇「山形県花粉アレルギー情報システム」が完成しました
企画情報室 高橋 裕一(2)
- ◇飛ぶ鳥跡を濁す
副所長 金田 忠昭(3)
- ◇山形県感染症患者発生状況 (2002年)
山形県感染症情報センター(4)
- ◇山形県における環境とのかかわりの深い貴重な症例
企画情報室 菅野 颯一(6)
- ◇胆道閉鎖症を知っていますか
生活疫学部 安部 悦子(7)
- ◇第23回山形県衛生研究所業務報告会演題
◇薬になる植物 (58) ミシマサイコについて
理化学部 笠原 義正(8)

No.128

- ◇ツツガムシ病に気をつけましょう
微生物部 大谷 勝実(2)
- ◇有毒植物による食中毒について
企画情報室 菅野 颯一(2)
- ◇シックハウス症候群からみた揮発性有機化合物について
理化学部 伊藤 健(3)
- ◇山形県市町村の平均寿命
企画情報室 菅野 颯一(4)
- ◇平成15年度衛生研究所調査研究課題
(5)
- ◇薬になる植物 (59) ウコギについて
理化学部 笠原 義正(6)

No.129

- ◇食品分析と液体クロマトグラフ/質量分析計 (液クロ/マス)
理化学部 辻 浩子(2)
- ◇手足口病の患者発生動向に変化
微生物部 安孫子千恵子(3)
- ◇薬になる植物 (60) ウコギについて
理化学部 笠原 義正(4)

No.130

- ◇水道水質基準が平成16年4月1日から変わります
理化学部 長岡 一郎(2)
- ◇感染症法の改正による感染症発生動向調査事業の変更点について
山形県感染症情報センター(3)
- ◇薬になる植物 (61) ウドについて
理化学部 笠原 義正(4)
- ◇来春のスギ花粉飛散予想
企画情報室 高橋 裕一(4)

薬になる植物 (62) カギカズラについて

世の中は、なかなか景気が良くなり、各企業では生き残りをかけた戦略的経営法がカギを握っているところ。植物界でも環境の悪化等から種の保存を目指して生き残り戦線が激しく繰り広げられています。もっともこれについては地球上に生命が誕生した時から始まっており、ダーウィンの種の起源やラマルクの用不用説などの研究によりさらに明確に認識できるようになりました。我々も自然淘汰の節理に従って生きているわけですが、植物の生長の目的はいかに光をとらえて光合成を行いエネルギーに変えるかであり、これが種の維持に関係してくるわけです。植物には木になる木本性のものと、そうでない草本性のものがあります。当然ながら大木になれば光を思う存分浴びることが出来ますが、下草と言われるような草本類はたいてい一年で枯れてしまい、その後分身として種子等をつくります。ここで不思議な仲間がいることにお気づきでしょうか。木でも草でもない茎をもつ植物です。これらを一般につる性植物といいます。木ではないので高いものによじ登り、光のエネルギーを取り入れようとする植物群です。あたかも目があり、高いものを目指して行動しているように見えます。この性質を光奇生と言うこともあるそうです。つるで巻き付いた木を枯らしてしまうことさえあります。からみつき方にも色々あり、つるが他のものにまきつくアサガオやフジのようなもの、ブドウやマメ、ウリのように巻きヒゲでからみつくもの、キツタのように木の幹や岩に付着し根を伸ばし、しっかりへばりついてしまうもの、カギやトゲなどを他の植物に引っかけてよじ登っていくものなどがあります。このようなことをよく観察すると新たな発見があり、自然の節理に驚かされることがあります。例えば、忍者が用いる道具のように城の石垣や瓦屋根に引っかける形の鉤を自ら作る植物があります。これは、カギカズラと言い日本に自生する常緑のつる性植物です。葉は対生し、葉の根元には枝が変化して出来た鉤状の刺があり、このカギで他の植物にからまって伸びていきます。不思議なことに、このカギの部分は昔から薬として用いられていました。

概要:カギカズラ (*Uncaria rhynchophylla*) はアカネ科 (*Rubiaceae*) の植物で、つるには鉤状の刺があります。これを取り乾燥したものを釣藤鉤ちようとうこうといい、漢方では頭痛や

めまい、小児のひきつけ、肩こり、いらいら感やのぼせに用いるとされています。これを配合した漢方処方には釣藤散、抑肝散、七物降下湯などがあり、釣藤散は高血圧症や慢性の頭痛、めまい、肩こり、メニエール氏症候群、神経症に用いられます。

成分:リンコフィリン、イソリンコフィリン、コリノキセンなどのオキシインドールアルカロイド。ヒルスチン、ヒルスチン、コリナンチンなどのインドールアルカロイドが含まれており、これらが薬効を示す成分とされています。

薬理作用:ヒルスチンやヒルスチンという成分は中枢興奮薬を与えた動物の運動を抑えるように作用し、麻酔薬による睡眠時間を延長させ、体温を下げる作用が認められています。このことから気を落ち着ける鎮静作用を有することが分かります。リンコフィリンやイソリンコフィリンにも類似の作用がありますが、作用がさらに強力です。また、釣藤鉤エキスには、不整脈を抑える作用や、血圧を下げる作用、血管を拡張させる作用、局所麻酔作用などが認められています。さらに、最近では、ネズミの記憶学習を改善する効果が研究されており、実験的に記憶障害モデルをつくり、釣藤鉤を飲ませると障害が改善されることが分かりました。アルツハイマー型や脳血管性

型の痴呆モデルにも有効であることが報告されています。

最近、キャツクロウという健康食品が注目を集めています。これは南米のペルーで取れる植物で、気管支喘息、関節炎、リウマチ、胃炎、胃潰瘍などに用い、免疫機能を高め、自然治癒力を活性化させると言われています。ペルーの先住民インディオが薬として用いていたとされ、現在研究が進んでいます。このキャツクロウ (猫の爪) はカギカズラと同じアカネ科の植物で属も同じです。日本ではキャツクロウの研究は進んでいませんが、カギカズラの研究は詳しく行われており、類似の作用が期待できるのではと考えられます。

他の植物と競い合いながら生き残りをかける生命感溢れる植物には、その生体内にも何か強力な作用を持つものが隠されているのかも知れません。人類は、それを少し利用させてもらい、ヒトの生体を調節し、病気を予防しなければなりません。

(理化学部 笠原 義正)



カギカズラ
「牧野新日本植物図鑑」より